絵本の読み聞かせと子どもの育ち
－美作大学附属幼稚園の実践を通して－

野々上瑞穂・浦上みゆき・大岩　玲子・太田　和美・山田　宏子
中上由紀子・竹田　理香・大下　幸甫・林　　朋茄

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第63号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2018，Vol．63．131～137

報告・資料・研究ノート

絵本の読み聞かせと子どもの育ち
－美作大学附属幼稚園の実践を通して－

Picture Book Reading and Children's Development -- Through Activities at Mimasaka University Kindergarten

野々上瑞穂[†]・浦上みゆき・大岩　玲子・太田　和美・山田　宏子
中上由紀子・竹田　理香・大下　幸甫・林　　朋茄

キーワード：幼児，絵本，読みきかせ，エピソード記述

はじめに

美作大学附属幼稚園では『学びの土台作り』を教育目標に掲げ、「健康な子ども」「しっかり物事をみることができる子ども」「話をよくきくことのできる子ども」「じっくり考えることのできる子ども」「人の気持ちがわかる子ども」を目指している。

2001年に施行された「子どもの読書活動の推進に関する法律」[1)]の第二条（基本理念）には「子ども（おおむね十八歳以下の者をいう。以下同じ。）の読書活動は、子どもが、言葉を学び、感性を磨き、表現力を高め、創造力を豊かなものにし、人生をより深く生きる力を身に付けていく上で欠くことのできないものであることにかんがみ、すべての子どもがあらゆる機会とあらゆる場所において自主的に読書活動を行うことができるよう、積極的にそのための環境の整備が推進されなければならない。」としている。さらに、第三条から第六条には、「国の責務」「地方公共団体の責務」「事業者の努力」「保護者の役割」が掲げられる。そこには子どもの読書に対するそれぞれの積極的な関わりが書かれている。幼児期の子どもにとっての読書活動は主に絵本が対象となり、その活動は主に家庭（保護者）や幼稚園、保育所やこども園が担い、役割を果たさなければならない。子どもたちと読書の関わりは、大人による読みきかせ等の行為が大きな役割を果たしているといえるだろう。

児童文学作家の中川[2)]は、「フランス文学者の桑原武夫さんは、すぐれた文学に面白さを感じるのは、私たちが能動的に作品に協力するからだと書いています」「読者は作家と一緒になって、感じ、考え、悩み、喜ぶ。書物の中でいろいろな心の経験を積むことは、人間が生きていくうえで生きる力になる」と述べている。

美作大学附属幼稚園では、これまでも絵本の読みきかせを重視した実践をし、家庭での読みきかせに対する啓発活動を継続して行ってきた。読みきかせを通して、感じ、考え、悩み、喜ぶ経験を積み重ね生きる力を育むということを踏まえ、美作大学附属幼稚園の目指す幼児像にむけ、「絵本の読みきかせ」がどのような役割を果たすのか「保育現場における絵本の読みきかせ」「幼児理解」「絵本選びと教諭の役割」の視点から分析検討することとした。

方　　法

園内研修Ⅰ

期間：2016年11月～2017年３月

対象：教諭８名（教諭経験20年以上６名、教諭経験５年１名、教諭経験１年１名）

方法

１．教諭を対象とした読みきかせに関する調査

教諭を対象に、幼稚園の実践場面における、絵本

の読みきかせに関する調査を行った。調査の内容は、「読みきかせの際に気を付けていること、心掛けていることは何か」「3歳児の絵本を選ぶポイントは？」「4歳児の絵本を選ぶポイントは？」「5歳児の絵本を選ぶポイントは？」「読みきかせに関して困っていること、悩んでいることは何か」であった。

2．保育現場における読みきかせの園内研修

教諭が絵本の読みきかせを行う様子を互いに観察し合い、検討を行った。

3．貸出絵本の選書見直し

4．朝の読みきかせの実施

クラス活動を行う前に、読みきかせ時間を定め、絵本の読みきかせを行った。

園内研修Ⅱ

期間：2016年4月～2017年3月

対象：3歳児、4歳児、5歳児

方法：クラス活動の中で、「絵本の読みきかせ」を通したエピソードを記述し、考察を行った。

結果及び考察

園内研修Ⅰ

1．教諭を対象とした読みきかせに関する調査

読みきかせに関する調査より、「読みきかせの際に気を付けていること、心掛けていること」として、子ども達が落ち着いて絵本を楽しめるように環境に配慮していることや、読み方や、絵本の選び方に気を付けていることがあげられた。「各年齢での読みきかせのポイント」としては、それぞれの教諭が、各年齢に応じて興味関心が高まる様々な工夫をしていることが明らかになった。「読みきかせに関して困っていること、悩んでいること」では、園生活の流れの中で絵本の読みきかせに要する時間の確保の難しさや、読みきかせの技術に関するものがあがった。意見を交わし、話し合うことで悩んでいたことを解決できたり新たな発見をしたりと、お互いに多くの事を吸収し合うことができた。取り組みを進める中で生まれた新たな疑問についても、園内研修の場で解決するようにした。研修会では、絵本を読むにあたって、言語体験の充実を図ること、想像と創造する楽しさを伝えることに併せて、絵本を楽しむことの大切さを再確認した。

2．保育現場における読みきかせの園内研修

各クラスの読みきかせの様子を観察した。「環境構成」「読み方」「幼児の反応・表情・つぶやき」に着目しながら客観的に観察することで、自身の保育を顧みる機会となった。観察後の意見交換では、教諭がどのように絵本を経験させるかというねらいの違いによって、読みきかせの方法や絵本選びに違いが出ることに気づいた。幼児が、これから始まる絵本に期待し、集中して話をきくためには安心できる環境を整えることが大切であることも確認した。

3．貸出絵本の選書見直し

従来、クラス図書の貸し出しは、幼児が様々な絵本に触れられるように、順番を決め、教諭主体で貸出しを進めてきたが、幼児が主体的に絵本選びを行う機会を取り入れる等、クラス図書の利用方法についても見直しを行った。また、クラス図書や読みきかせの題材選びが各教諭の主観に任されてきたことに気付き、改めて、幼稚園教育要領[3)]と保育所保育指針[4)]を参考にし、年齢に合った題材選びにも着手した。将来的には本園独自の年齢別推薦図書一覧作りに取り組みたいと考えている。

4．朝の読みきかせの実施

本園では、日々の保育の中で教諭一人一人が「絵本の読みきかせ」が、子ども達の成長に欠かせないものとして捉え、ほぼ毎日子ども達への読みきかせを行ってきた。しかし、読みきかせの時間を決めているわけではなく、教諭によってばらつきがあった。また、日々の生活の中で、忙しさから時間の確保ができないこともあった。それらの理由から、「朝の読みきかせ時間」を確保することを教諭全員で確認し、実行することにした。 朝の自由遊びでしっかり体を動かした後に、動から静の活動を意識し、読みきかせを行うようにした。1日の流れの中に、読みきかせの時間を習慣として取り入れることで、子ども達もその時間を楽しみにし、集中してきくことができるようになった。

園内研修Ⅱ

「絵本の読みきかせ」を通したエピソード記述

子どもの様々な行動の背後には、必ず気持ちや思いが動いていることがわかる。そこで、子どもの傍らに立って子どもに寄り添い、教諭自身が子どもの心に目を向け感じようと努めていくことが大切であると考えた。保育現場における読みきかせの見直しを行い、より一層幼児理解を深めるため、自身の保育を振りかえる手がかりとするために、絵本に関する幼児のエピソード記述を行うことにした。

［生活の中の絵本］

エピソード１（３歳児）

この日は米飯給食だった。弁当の日に比べ意欲が低く、食べ始めて10分ほどすると箸が止まる幼児が多かった。すると、H児が「もったいないばあさんが来るで！なぁ！」と私に言ってきた。「そうじゃなあ、もったいないばあさんが来て給食を食べていくかもしれん！」と返すと、その会話を聞いていた子ども達は、はっとした表情で給食を食べ始めた。この日は昼食前に『もったいないばあさん』[5]を読んでいた。

エピソード２（４歳児）

朝の会が始まる前だというのに、なかなか私語がおさまらなかった。すると、私語をしていた幼児の横に座っていた幼児が「お腹の中に鬼がおるんじゃないん？」と声をかけた。「おらんし。」と、言って私語をやめ、その後、朝の会を始めることができた。『おなかのなかにおにがいる』[6]は、子ども達のお気に入りの絵本でこれまでに３回読んでいた。

今井[7]は、「幼い子どもたちは、まず日常性のある身近な生活が描かれている絵本から、自分と同じような主人公を見出したり、自分の大好きなものを発見し、絵本の世界に引きこまれていくようです。」と述べている。（傍点原文）エピソード１とエピソード２は、教諭や友達と関わる生活の中で、絵本の場面を思い出し、自分の考えや思いを表現している姿が描かれているエピソードである。絵本の内容から生活のモデルになる事柄を幼児自身が捉え、教諭や友達と関わったり、生活の中で生かすことができるようになっていくことが読み取れる。また、絵本の世界の中で感じたことや、経験の中で習得した知識を合わせ、行動力や思考力の幅を広げることができるだろう。

［絵本から知る言葉］

エピソード３　（４歳児）

『クリスマスのふしぎなはこ』[8]を読みきかせている際、「超特急でサンタさんがプレゼントを運ぶ」という表現があった。一番前に座って聞いていたT児は耳慣れない表現だったのか「ちょうとっきゅう…だって」と、つぶやいた。すると、隣に座っていたK児がT児に向かって「すごく速くっていうことだよ」と小さな声で知らせていた。私は、特に子ども達のつぶやきには触れず、そのまま絵本を読み進めた。

その日の降園時に、子ども達から「もう一冊絵本を読んで！」とリクエストがあがった。しかし、降園時間ぎりぎりだった為「ごめん…読んであげたいけど、もう、サヨナラしなくちゃいけない時間だから…。また明日読もうよ！」と伝えると、どうしても絵本が読みたかった様子のT児が「えーっ！じゃあ先生“超特急”で読んでよ！」と言った。周りの子たちも「そうじゃ！超特急で読んで！」口々に言い始めたので「わかった！じゃあ、今日は超特急で読むね！」と『ぺんぎんたいそう』[9]を早口で読んでみた。いつもとは違う速いスピードの体操が新鮮だった様子で、子ども達は笑い声をあげながらぺんぎんと一緒に身体を動かして楽しんでいた。

エピソード３は、絵本に出てくる“超特急”という言葉の理解から生まれたものである。ここでのポイントは、担任教諭が“超特急”という言葉について特別

に説明をしなかったことである。T児は友達の説明と絵本の文章と挿絵から“超特急で”の持つニュアンスを感じ取ったのだろう。T児がこの日の朝、絵本を通して知った“超特急で”という言葉をさっそく日常会話の中に取り入れて使っている姿からも、絵本を一緒にみたりきいたりすることで、同じ世界を共有する喜びを知ったり、新たな世界へと視野を広げていくことができると考えられる。幼稚園教育要領の領域「言葉」の内容の取り扱いに「幼児が自分の思いを言葉で伝えるとともに、教師や他の幼児などの話を興味をもって注意して聞くことを通して次第に話を理解するようになっていき、言葉による伝え合いができるようにすること。」とある。新幼稚園教育要領[10]の「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」では、「言葉による伝え合い」の中で、「先生や友達と心を通わせる中で、絵本や物語などに親しみながら、豊かな言葉や表現を身に付け、経験したことや考えたことなどを言葉で伝えたり、相手の話を注意して聞いたりし、言葉による伝え合いを楽しむようになる。」と示されている。その方向に向かって保育を行っていく上でも、絵本の読みきかせの効果が期待できると思われる。絵本の読みきかせを通して注意深くきくという経験が重ねられたり豊かな言葉や表現を身に付けられたりすることで、言葉による伝え合いの力を養うことにつなげていくことができるのではないかと推察する。

［遊びの中の絵本］

エピソード４（４歳児）

『くれよんのくろくん』[11]の中で、後半に出てくる花火のページを開いた瞬間、子ども達の「わー！」という大きな歓声が上がった。「この花火本当にできると思う？」と、子ども達に聞くと「できんと思う。」という答えが多くかえってきた。「じゃあ、明日やってみようか！」と約束をして降園した。次の日、まず真っ白な画用紙をクレパスの様々な色で塗りつぶした。続けて、その上から黒のクレパスを塗っていった。「真っ黒になっていきよる…」と、不安そうにしながら塗りつぶしていった。画用紙が真っ黒になったところで、割りばしで絵本の花火になるように削っていった。すると、「うわっ！色が出てきた！」「花火じゃ！」と言って満足そうにしていた。

エピソード５（３歳児）

ひとつのフープに２～４人くらい入り、バスや電車などの乗り物に見立てて遊ぶ姿がよく見られる。行き先を決めながら、園庭をあっちこっちに走って遊ぶことが楽しい様子だ。単純な遊びであるが、子ども達は心の中で乗り物のイメージを持ちながら遊んでいる様子で、乗車する人も途中で降りたりまた乗ったりしている。５月の誕生会で教諭が演じる「おべんとうバス」（絵本『おべんとうバス』[12]をアレンジしたもの）の劇を観た後は、このフープがバスになっている様子で「誰が乗っているんですか？」と声を掛けてみると「これは、おべんとうバスでーす！」「ぼくは、たまごやき」「私は、いちごなんよ」と返事が返ってきた。９月頃になると『まてまてタクシー』[13]という絵本が気に入り、繰り返し読むようになった。すると、この頃からフープがタクシーになっており、お客役の子どもが「乗せてくださーい」とフープの中に入れてもらおうとすると、タクシーは、わざと走り過ぎて行ってしまい、お客が「まてまてタクシー！」と言いながら追いかけることを楽しむようになっていた。

エピソード４からは、絵本をみることで味わった驚きが、遊びの中で再現でき、感動体験につながっている様子を捉える事ができた。エピソード５では、乗り物ごっこに、普段皆で楽しんでいる絵本の内容が上乗せされ、同じ風景を思い描きながら遊んでいることがうかがわれ、絵本が友達同士の繋がりの媒体になっていることが感じられた。

西[14]は、「絵本は知的発達を促進するためだけに与えられるものではなく、何よりもまず、感動や意味の

体験、想像の世界の広がりを共有させてくれるものなのである。」としている。絵本を通して、感じたものを遊びの中に反映していくことで、子ども同士が刺激を与え合うことが期待されると思われる。

エピソード６（３歳８か月）
［絵本とO児の関わり］４月

入園当初、O児の発語は単語が主で、声を掛けてもオウム返しをすることも多く、教諭や他児との意思の疎通が難しい面があった。絵本にも関心は示さず、クラスでの読みきかせの時間は友達の輪から外れ、ふらふら立ち歩いたり窓の側に行って外を眺めたりしていることが多かった。家庭訪問で母親に、家庭での様子を尋ねた際も、「絵本に興味を示さないので、どんな絵本を読めばよいのかわからない」とのことであった。

入園式に観た教諭劇『はらぺこあおむし』[15]（歌付き）に、クラスの子ども達が関心を持っている様子なので、部屋でも『はらぺこあおむし』のCDをかけて歌うことを繰り返した。子ども達は、喜んで聞き入り、一緒に口ずさむようになっていき、毎日のようにCDを聞いたり、絵本を読んだりして楽しむようになった。そんな日々を何日か繰り返したある日、トイレから鼻歌が聞こえてきたので覗いてみると、O児が『はらぺこあおむし』の歌を歌っており、しかも、歌詞をよく覚えていてほぼ間違いなく歌っていた。その姿に私は驚き「Oちゃん、はらぺこあおむしの歌上手だねえ。」と、O児と一緒に歌を歌うと笑顔になり、とてもうれしくなった。そこで、さっそく『はらぺこあおむし』の本を読んでみると、O児も興味を示し、座ってクラスの子ども達と一緒に絵本を見る姿が見られた。

O児は『はらぺこあおむし』の絵本をきっかけに、『おじさんとすべりだい』[16]、『かばくん』[17]、『ぺんぎんたいそう』、『まてまてタクシー』など、単純で分かりやすい内容の絵本には関心を示し、友達と一緒に座って見ていることが増えていった。絵本の読みきかせカードの母親からのコメントにも、「『はらぺこあおむし』や『ぐりとぐら』[18]の話が最近のお気に入りです。」という内容が書かれており、文章にリズムや繰り返しのあるストーリーを好むようになり、家庭でも絵本を楽しめるようになってきていることがうかがわれた。

エピソード７　（４歳２ヶ月）
［絵本とO児の関わり］10月

２学期に入ると、クラスの子ども達は友達同士の繋がりが広がり、何人かで集まって聴診器や看護帽のお面を身に付け、お医者さんごっこを楽しむ姿が見られるようになった。３歳児にとって、生活に身近な病院の模倣は遊びに繋がりやすいようで、医者や患者の役になりながら、喜んで遊ぶようになっていった。「お医者さんごっこ」をよくして遊ぶようになってきたこともあり、病院に関する絵本を読んでみたいと考え、『アントンせんせい』[19]を読みきかせに選んだ。すると、遊びと絵本の内容がリンクしたのか毎日のように「今日も『アントンせんせい』読んで！」と、リクエストの声があがるようになった。

教師も、子ども達のごっこ遊びの中に参加し、アントンせんせいに登場する動物になって「ごっごっ…、先生、のどが痛くて声が出ないんです…。」と台詞を言ってみると、「それは、大変です！うがい薬を持って来ましょう！」などと、絵本の場面を再現して遊び始めた。そこで、もっと子ども達が絵本の世界に入って遊ぶことができるように、絵本のペープサートを作り、すぐに取り出して遊べる所に設定したり、薬や注射のカードを作っておくなどの工夫をした。また、表現遊びがより盛り上がるように、「動物村のお医者さん、私が診察したならば、誰でもよくなる、すぐによくなる！ハイッ！お大事に～♪」（『ねこのお医者さん』[20]）の替え歌と、台詞に簡単な節をつけて

歌を歌って遊んでみると、子ども達はすぐに覚えて、ごっこ遊びの中でも、口ずさんで楽しむようになった。

O児は、少しずつ語彙が増え、以前よりもクラスの友達と一緒に絵本の時間を過ごせるようになってきていたが、『アントンせんせい』の絵本を読んでもあまり、関心を示してはいない様子であった。しかし、台詞に節を付けて歌って遊び始めたある日、O児がペープサートを手に取り、「動物村〜のおいしゃさ〜ん…ハイッ！おだいじに〜♪」と歌いながら友達や教師に見せて遊ぶ姿が見られた。『はらぺこあおむし』の時のように歌の歌詞の方が、O児に浸透しやすい事を思い出し、教師もペープサートを使って台詞にこたえていくと、周りにいた子ども達も興味を持って参加してきて、すぐにアントンせんせいごっこが始まった。O児も、笑い声をあげながら「お薬どうぞ〜」「注射怖いね〜」と薬や注射のカードを手に、聴診器を首に掛け、アントンせんせいになったり患者になったりして友達に交じって遊び始めた。会話によるコミュニケーションが難しく一人遊びが主だったO児であったが、この日は笑顔で友達と楽しそうに一つの遊びを共有する姿が見られた。そして、このことをきっかけに、O児も、アントンせんせいごっこに参加して遊ぶようになった。

園での読みきかせは、O児にとって、興味のない絵本がほとんどであったと思われるが、クラスの子ども達が何度も「○○の本をもう一度読んで！」と、リクエストすることで、（O児一人に対して、『アントンせんせい』の絵本を読みきかせたのでは、興味を持つことが無かったかもしれないが）O児の意志に関わらず繰り返し、絵本を目にしたり聞いたりする経験が積み重ねられたことが、絵本に関心を持つきっかけになったのではないかと思われる。また、物語の内容が、繰り返しの内容であることや、節を付けて台詞を知らせたことで、O児にとって親しみやすいものになったのではないかと思われた。台詞を使ってではあるが、友達との言葉でのやりとりを楽しむことで、周囲への関心が高まり、言葉の発達が促されたと推察された。

エピソード６，７からは、友達や教諭に刺激を受けることで絵本への興味が高まり、絵本の内容を取り入れながら共通のイメージを持って遊ぶ姿や、言葉に対する感覚が養われたと思われる姿の現れや、家庭では得られない集団による育ちをみることができた。また、絵本の時間が楽しみになることで、話を聞く態度や集中時間にも変化がみられるようになった。

以上、７つのエピソードを紹介し、それぞれについて考察を加えてきた。

鯨岡[21]は、「一歩先に主体として育った保育者が子どもを一個の主体として受け止め、自らの主体としての思いを返す中で、子どもが一個の主体として育ってくる」「『受け止める』だけでも駄目、『させる』だけでも駄目、『思いを受け止め、思いを返す』ところに保育者一人ひとりの主体性が息づいているのでなければなりません。」と述べている。エピソード記述の効果としては、教諭自身が幼児の姿をどのように捉えているのかを客観的にみることができ、保育の振り返りの手がかりとすることも得られた。

まとめ

本研究の目的は、生きる力を育むことを踏まえ、絵本の読みきかせを通して得られる効果を、「保育現場における絵本の読みきかせ」「幼児理解」「絵本選びと教諭の役割」に視点をおき検討することであった。

絵本の読みきかせを通して、幼児は絵本や物語に親しみ、イメージを膨らませる楽しさを味わう事ができた。幼稚園での読みきかせでは、教諭や友達と一緒にみたりきいたりすることで、その場にいるみんなと同じ世界を共有する楽しさや、心を通わせる喜びを味わうことができる。また、絵本を通して自分の知らない世界にであい、興味や関心を広げていく。心を動かす

経験をし、感性を働かせる中で、表現する喜びを味わい意欲を高めることが期待できると思われた。

幼児期の教育が、生きる力の基礎となる土台を培うということからも、幼稚園での絵本への取り組みは、幼児期だからこその言葉を育て、心を育てる大切な活動であることを改めて実感できた。

今後も取り組みを継続し、幼児・教諭・保護者の三者それぞれの変化がより良い相乗効果を生み、「学びの土台」をしっかりと構築できるようにしていきたい。

註

1）文部科学省「子どもの読書活動の推進に関する法律」(2001)

2）中川李枝子『子どもはみんな問題児。』新潮社,2015

3）文部科学省『幼稚園教育要領』(2008)

4）厚生労働省『保育所保育指針』(2008)

5）真珠まり子『もったいないばあさん』講談社,2004

6）小沢孝子•西村達馬『おなかのなかにおにがいる』ひさかたチャイルド,1982

7）今井和子『ことばの中のこどもたち　幼児のことばの世界を探る』童心社,1986

8）長谷川摂子・斉藤俊行『クリスマスのふしぎなはこ』福音館,2001

9）齋藤槙『ぺんぎんたいそう』福音館,2016

10）文部科学省『幼稚園教育要領』(2017告示)

11）なかやみわ『くれよんのくろくん』童心社,2001

12）真珠まり子『おべんとうバス』ひさかたチャイルド,2006

13）西村敏雄『まてまてタクシー』福音館,2015

14）西隆太朗「絵本を通して子どもと関わること―2歳児クラスでの相互関係とイメージの展開―」『保育の実践と研究』Vol.19 No.2 ,2014

15）エリックカール・もりひさし訳『はらぺこあおむし』偕成社,2010

16）谷口國博・村上康成『おじさんとすべりだい』ひさかたチャイルド,2014

17）岸田衿子・中谷千代子『かばくん』福音館,1966

18）なかがわりえこ・おおむらゆりこ『ぐりとぐら』福音館,1967

19）西村敏雄『アントンせんせい』講談社,2013

20）増田裕子『CD　ねこのお医者さん（増田裕子のミュージックパネル)』クレヨンハウス,1999

21）鯨岡峻、鯨岡和子『エピソード記述で保育を描く』ミネルバ書房,2009